

【 会員投稿 】 上州を彩った文人たち (その2)

ひまじん

文人たちなどと、使い慣れない用語を タイトルに使ったことが気になって、改めて辞書を引いてみた。文人に対する言葉は「武人」とあり、「文人」とは非常に広い意味に使われていて、軍事以外の文事にたずさわる人とある。ようするに、政治家・学者まで含める言葉らしい。

本稿ではこのように使うと、幅が広すぎて手に負えなくなるので、文学者という狭い範囲に限定していることをお断りしておきたい。

萩原 朔太郎と萩原 葉子



萩原朔太郎

朔太郎といえば、彼の詩が国語の教科書等によく掲載されるので、彼の名前を知らない人は少ないだろう。

まともに紹介するのも、味がないので、話を逆にして、葉子の方から始めてみる。

萩原葉子は朔太郎の長女で、大正9年生れである。

著名な詩人の子供なら、さぞかし芸術性豊かな環境で育ったと、想像しがちだが、彼女の書を読んでも、全くアテがはずれた。「私が八歳の時に父母が別れ、私と妹は父の故郷G県の祖父母の許に引取られて育った。朔太郎と一緒に暮したのはわずかの月日で、間もなく父は上京したのだった。・・・

祖母にしてみれば、とんだ厄介者を背負わされた恰好で、その腹いせはすべて私達に当たり、それがまた泣きわめく原因となるという、手のつけられない状態だった。」

人生のスタートから、意地の悪い厄病神に取付かれたようなのだ。その後、上京、持家の建築転居、父の再婚失敗等々に遭遇するが、彼女が22歳のとき、昭和17年朔太郎は肺炎のため、55歳で死亡してしまう。

葉子は24歳で職場の先輩と結婚をし、長男も誕生するが、夫は奇妙な男で 夫婦の間は「努力をしても電流が流れない平行線で、地獄のくらし」と表現している。34歳のとき、協議離婚をした。その後、葉子は知人に勧められ『父・萩原朔太郎』を刊行したのは39歳、翌年この作品により日本エッセイストクラブ賞を受賞した。

娘が、偉大な作家・父のことを書いて、世に出たのは、森鷗外→森茉莉・小堀杏奴、幸田露伴→幸田文（「流れる」日本芸術院賞受賞）等が有名であるが、『父』に関する作は売れても、その後、筆でメシが食えるようになるのは、容易ではないのだ。

葉子は洋裁で生計を支えながら、エッセイだけでなく小説も手掛け、いつしか文筆家といわれるようになる。

代表作『葎麻の家』（イラクサと読む）を刊行したのは56歳のときだ。戦前、父の設計した世田谷の家で祖母・叔母・妹を含む女性中心の同居生活を書いているのだが、イラクサの葉茎のようにやたらにとげとげしくて、主人公を刺す様子がリアルでなやましい。

この作品で女流文学賞を受けた。

上の写真は、大正13年朔太郎38歳の時である。

明晰そうな澄んだ瞳、ほっそりとした容貌、今ふうにいえば“イケメン”である。彼の実家は前橋市中心街千代田町の医院であった。父は東大出の医師で下足番を置くほどに繁盛したとある。

当然あとを継ぐものと思われていたが、中学卒業後五高(熊本)・六高(岡山)・慶応等へ入退学を繰り返し、結局どこも卒業しなかった。27歳ごろより、詩や短歌の習作をはじめ、マンドリン倶楽部をつくる等自由気ままな生活をおくる。

31歳のとき 詩集『月に吠える』を刊行、詩壇の好評をえた。詩のみならず、随想・評論等も発表し、室生犀星を通じ、文壇人との交遊も多くなる。

「文化的伝統のない環境が、自分を大胆な自由人にした。私が俳人にも、歌人にも、小説家にもならず、全く非伝統的な新しい文学であるところの詩を作り、詩人に成ったのはこのためである。」と書き残している。

彼はほとんど東京で暮したのだが題材は群馬に多くとった。‘新前橋駅’‘広瀬川’‘監獄裏の林’‘大渡橋’等々、前橋を都会の憂愁で飾った。バラ園の記念館・前橋文学館への散策をお奨めしたい。



朔太郎記念館

2012/05/16 20:59

最後に『国定忠治の墓』を転載しておこう。

「わがこの村に來りし時 上州の蚕すでに終りて 農家みな冬の鬩(しきみ)を閉したり。太陽は埃に暗く凄而(せいじ)たる竹藪の影 人生の貧しき惨苦を感ずるなり。見よ 此処に無用の石 路傍の笹の風に吹かれて 無頼の眠りたる墓は立てり。」(以下略)

会員投稿のご協力有難うございます。現在の未掲載原稿は、二件です。引き続きよろしくお願ひします。

● 今月の【 細野水彩画廊 】：『やまなみ』

<http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/hosono2012-09.pdf>

● 【 須永写真ギャラリー 】：『 湖面紋様 』

<http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/sunaga2012-08.pdf>